

【研究ノート】

ソウルの中のフィリピンのまち：^{ヘファドン}恵化洞Exploring Seoul's Multicultural Streets:
A Case Study of Hyehwa-dong Filipino Market金 兌恩[†]

1 はじめに

韓国における外国人は、2022年12月現在、224万5,912人で総人口の4.4%を占めている。コロナ禍の影響で2年目の減少を見せた2021年と比べて、14.8%も増加している¹⁾。総人口のうち外国人や帰化者など海外からの移住背景をもつ人口が占める割合が5%を超えると「多人種・多文化社会」とみなすOECDの基準に基づき、韓国社会の多文化社会への進入が目の前に迫っていると、複数の韓国メディアが取り上げている。例えば、『東亜日報』2023年10月30日付の社説欄には、「まもなく人口の5%が外国人…我々も『多人種・多文化社会』」という見出しの記事が掲載されている。

韓国で外国人が増えるようになったのは、1990年代からである。1990年の時点で、韓国に滞在する外国人は5万人にも達していなかったが、1990年代から状況は大きく変わった。1990年代前後から、韓国社会における産業構造のさらなる変化やソウル周辺での大規模の新都市の建設などにより、労働力不足が深刻化し、海外からの労働力への需要が高まった。この時期から韓国社会には韓国系中国人をはじめ、アジアからの外国人が急増しており、2000年代に入ってから、韓国人と結婚したアジア出身の女性や外国人雇用許可制の導入（施行は2004年8月）による外国人の非専門労働者がさらに増加した。2007年には外国人数が100万人を超えるようになり、2016年には200万人を超えた。また、3年後の2019年には、252万4,656人で最高値を記録した。その翌年から2年間は、コロナ禍の影響で外国人数が減少したが、2022年には、再び増加に転じた²⁾。

91日以上滞在する登録外国人³⁾を基準にして、外国人の居住地域をみると、ソウルとその周辺の仁川と京畿道に60%が居住している。外国人の21%がソウルに住んでおり、ソウルには外国人のまちとして知られているところもいくつかある。大林洞・加里峯洞の「朝鮮族のまち」（金兌恩, 2018）をはじめ、東部二村洞の「日本人のまち」、盤浦洞の「フランスのまち（ソレマウル）」（金兌恩, 2022）、梨泰院洞の「ムスリムのまち」、光熙洞の「中央アジアのまち」、恵化洞の「フィリピンのまち」などがその例である。これ

[†]立教大学社会学部兼任講師

らの外国人のまちの形成背景や歴史、まちのイメージや象徴性などは、一枚岩的ではない。ある国出身の人たちが特定の地域に集まって暮らしながらフルタイム的な(空間的)コミュニティを形成している場合もあり、いろいろな地域に住みながら、ある拠点を中心に特定地域に一時期的かつ定期的に集まって、一種のパートタイム的な(空間的)コミュニティを形成する場合もある。以上で挙げた外国人まちのほとんどは前者の例であるが、フィリピンのまちとされる恵化洞は後者の例であろう。

フィリピンのまち「リトルマニラ」として知られている恵化洞は、メディアからも多く取り上げられている。ところが、実際、恵化洞やその周辺、恵化洞が位置している鍾路区に住んでいるフィリピン人は、たった数十人に過ぎない。ソウル全体をみても多く住んでいるわけではなく、全体外国人と比べて、フィリピン人のソウルでの居住率はかなり低い。それにもかかわらず、この地域がフィリピンのまちとして知られるようになったのは、恵化洞の路上(歩道)の一角で毎週日曜日にフィリピンマーケットが開かれていること、そしてそこにあるカトリック教会に多くのフィリピン人が通っているためである。週1回程度、たった数時間のみ1,000人前後のフィリピンの人たちとモノが集まる空間に変わる。

なぜ、恵化洞には、多くのフィリピン人たちが集まるようになったのか。なぜ、恵化洞なのか。そこはどのような歴史や地域的な特徴をもっているのか。「リトルマニラ」というイメージは、どのようにして形成され、維持されてきたのか。その場をめぐって、どのようなことが起きており、議論されているのか。本稿では、これらの問いへの答えを探っていく。調査方法としては、関連文献及び、政府やソウル市、鍾路区など行政機関のウェブサイトから得た関連情報・統計データ、マスメディアの関連記事・報道内容、そしてフィールドワーク(2017年8月17日(日曜日)に実施)のデータの分析を中心とする。

2 韓国で暮らすフィリピン人

91日以上滞在する登録外国人のデータをみると、2021年12月現在、韓国で暮らすフィリピン人は3万8,035人であり、全体登録外国人(109万3,891人)の3.5%を占めている⁴⁾。韓国系中国、ベトナム、中国(韓国系を除く)、ウズベキスタン、カンボジアに次いで6番目である。男性(52%)が女性(48%)より少し多いが、全体外国人に比べると女性の割合が高い方である(全体外国人の場合は男性56%、女性44%)。在留資格をみると、非専門就業と結婚移民の二つの在留資格をもつ人が、フィリピン人の8割近くを占めている(それぞれ50.1%、28.7%)。居住地域をみると、京畿道に最も多く住んでおり(37.6%)、次はソウル8.3%、慶尚南道7.7%、仁川6.1%などの順である。

韓国社会にフィリピン人が増え始めたのは、1990年前後である。先述したように韓国ではこの時期に産業構造の変化の加速化や労働力の不足などにより、海外からの労働力を求めていた。一方で、フィリピン人の国際移動もより拡大していた。1990年代に入り、グローバリゼーションが深化していく中で、韓国系中国人をはじめ、中国やベトナム、フィリピンなどのアジアの国々から多くの外国人が韓国にやってきて、その規模を拡大し続けた。コロナ禍の影響で外国人が減少した2020年から2021年までの2年間を除くと、毎年増加し続けてきた。フィリピン人の場合は、2010年代半ばまでほぼ毎年増加してきたが、2017年頃から減少気味を見せており、2020年から2年間はさらに減少した。

<表1>韓国／ソウルにおける国籍別外国人(2021年12月)

順位	韓国			ソウル		
	国籍	人数	構成比 (%)	国籍	人数	構成比 (%)
1	韓国系中国人	253,533	23.2	韓国系中国人	79,337	35.0
2	ベトナム	178,928	16.4	中国(韓国系を除く)	49,783	22.0
3	中国(韓国系を除く)	170,852	15.6	ベトナム	19,821	8.7
4	ウズベキスタン	44,470	4.1	アメリカ	10,340	4.6
5	カンボジア	40,263	3.7	日本	8,515	3.8
6	フィリピン	38,035	3.5	台湾	7,431	3.3
7	ネパール	35,447	3.2	モンゴル	6,511	2.9
8	タイ	31,347	2.9	フィリピン	3,175	1.4

* 91日以上滞在する登録外国人を基準としている。韓国統計庁KOSISから作成

フィリピン人の在留資格に焦点を当ててみると、非専門就業が50.1%で最も多く、次は、結婚移民(28.7%)、訪問同居(5.9%)、芸術興行(3.7%)、その他(2.6%)、永住(1.7%)の順である。フィリピン人の半分が非専門就業の在留資格をもってあり、3割近くが結婚移民者で、非専門就業と結婚移民の在留資格をもつ人が全体フィリピン人の約8割を占めている。全体外国人と比較すると、この二つの在留資格の割合がかなり高く、永住や留学の割合はとても低い。全体登録外国人の場合、永住と留学はそれぞれ15.3%と10.1%であるが、フィリピン人の場合は、永住が1.7%、留学が0.9%に過ぎない。

性別の特徴に焦点を当ててみると、フィリピン男性の86%が非専門就業の在留資格を、女性の58%が結婚移民の在留資格をもっている。フィリピン女性の場合、結婚移民に非専門就業(11%)、訪問同居(10%)、芸術興行(7%)を加えると、86%にまで上がる。他の上位の外国人グループと比べて、フィリピン人の場合は在留資格の偏りや男女差が目立つ。

<表2>韓国における在留資格別フィリピン人(全体外国人との比較、2021年12月)

順位	全体外国人		フィリピン人	
	在留資格	構成比 (%)	在留資格	構成比 (%)
1	非専門就業	19.5	非専門就業	50.1
2	永住	15.3	結婚移民	28.7
3	結婚移民	12.1	訪問同居	5.9
4	訪問就業	11.3	芸術興行	3.7
5	留学	10.1	その他	2.6
6	訪問同居	8.6	永住	1.7

* 同上

二つの在留資格について詳しくみてみよう。非専門就業の場合は、2003年8月、韓国政府による「外国人労働者の雇用などに関する法律」の制定及び、それに基づく「外国人雇用許可制」の導入(2004年施行)により、非専門労働者の受け入れが拡大した。非専門就業の在留資格をもつフィリピン人は、カンボディア、ネパール、ベトナム、タイ、インドネシアに続き6番目であり、全体非専門就業の9%を占めている。フィ

フィリピン人の非専門就業の男女比は、それぞれ90%と10%で、全体外国人の非専門就業の男女比(91%、9%)とほとんど変わらないが、結婚移民者の場合は大きな違いがある。韓国人と結婚した外国人を指す結婚移民者は1990年代半ばから増え始め、2000年代にはいっそう増加した。結婚移民の在留資格をもつフィリピン人は、ベトナム、韓国系中国、中国、日本に続いて5番目であり、全体結婚移民者の7%を占めている。性別にみると、フィリピン人の結婚移民者の96%が女性であり、男性の結婚移民者の割合はたった4%に過ぎない。全体外国人と比べて男女比の差がより顕著である(全体外国人の結婚移民者の場合、男性が20%、女性が80%)。

フィリピン人の居住地域をみると、全体外国人と比べて、京畿道での居住率が高く(37.6%)、ソウルでの居住率(8.3%)は低い(全体外国人のソウル居住率は20.7%)。ソウルで暮らすフィリピン人の数は2010年代にほぼ毎年減少し、2021年末現在、3,175人となった。また、居住地域における男女差が目立つ。韓国で暮らすフィリピン人の男女比はそれぞれ52.3%と47.7%で、全体外国人と大きな違いは見られないが、ソウルだけをみると大きな差異が見られる。ソウルに居住するフィリピン人のうち女性が占める割合は74.5%にもなっており、全体外国人の女性の割合(54.1%)よりはるかに高い。ソウルに暮らすフィリピン人の4人に3人が女性ということである。

<表3> 韓国/ソウルにおけるフィリピン人の居住率(全体外国人との比較、性別、2021年12月)

	居住地域	男性比(%)	女性比(%)
全体外国人	韓国全体	55.8	44.2
	ソウル	45.9	54.1
フィリピン人	韓国全体	52.3	47.7
	ソウル	25.5	74.5

* 同上

また、フィリピン人のソウルでの居住率を区別にみると、フィリピン大使館、フィリピン専門の旅行会社や語学学院などがある龍山区(ヨンサング、18.4%)以外には、目立つほどのフィリピン人の集住地域は見られていない。恵化洞が位置する鐘路区に住むフィリピン人はたった56人で、ソウル市の25区のうち鐘路区に居住するフィリピン人の割合は最も低い方(下から2番目、居住率1.8%)である。

ここまで、韓国で暮らすフィリピン人の現状について検討した結果、フィリピン人のソウルでの居住率は全体外国人と比べて低く、その人数も多いとは言にくい状況であることがわかった。また、フィリピン人たちは、ソウルの中でも特定地域に集住しているわけでもなく、フィリピンのまちとされる恵化洞が位置する鐘路区で暮らすフィリピン人は、かえってソウルの中でも最も少ない方であることも確認できた。それではどのようにして、ソウル市鐘路区恵化洞にフィリピン人のまちが形成されたのか、その背景について、まずは歴史から探っていくことにする。後述するが、ここにフィリピンマーケットが形成される最大の要因は、カトリック教会でタガログ語のミサが行われていること、そしてカトリック信者のフィリピン人たちがミサに参加するためにここを訪れるようになったことである。すなわち、この地域に居住しているわけでもなく、店を所有しているわけでもないエスニック・マイノリティの人々が、自分たちのマーケットを形成・維持することができる重要な背景には、宗教がその基盤となり、媒介となっているという

ことがある。

3 恵化洞におけるカトリックの歴史⁵⁾

恵化洞はどのようなまちだったのか。その場の多文化性に焦点を当てて、地域の特徴を調べてみると、朝鮮時代後期まで遡ることになる。

朝鮮時代後期に、カトリックの信仰が流入され、信者たちは弾圧を受けていながらも、集会や信仰活動を続けていた。現在の恵化洞の周辺にもカトリックの秘密結社があったとされている。1909年、ドイツのベネディクト会が恵化洞（周辺も含む）の土地を購入し、そこに修道院を設立し、朝鮮人への宣教活動を展開した。同修道院は、後ほど当時の恵化洞の地名である柏洞（ベクドン）から「柏洞修道院」と呼ばれるようになった。自給自足を目指すベネディクト会は、この地域での宣教活動だけではなく、教育活動、文化活動にも力を入れていた。柏洞修道院の3万平方メートルの敷地内には、カトリック教会を始め、実業学校や教員養成学校、寮、畑、果樹院、木工場、鉄工場など、生活に必要な様々な施設やものを備えながら町を形成し、ドイツ人と朝鮮人の修道者たちと100人余りの生徒たちが集団生活をしてきた。修道士たちは地域や朝鮮の人たちとも活発な交流をし、文化や知識の普及活動も行われ、朝鮮で初めて養蜂に関する本や獨朝辞典の編纂、ワイン製造も行われていたという。その敷地内には風車も設置されており、そこは「ドイツ村」として呼ばれていた。当時の恵化洞の異国的な町の様子が、1924年7月24日付の『東亜日報』の社会面に「私の町の名物」として以下のように紹介されている。

恵化洞に德国人が住んでいるところがあります。その中に工場があり、学校があり、寮があり、菓草畑があり、いろいろなものがあり、教堂まであります。德国人の村です。いいえ、德国を縮小したものです。物産奨励を主張し、自作自給を言う人たちが見習うべきです。ドイツ南部のミュンヘンにある本部から人とお金を送ってここを経営しているそうです。大戦中はアメリカにあるローマ旧教からお金を出してくれたそうです。……まだドイツ人の村であるここに奇妙な物体が一つあります。これが風車だと知っている人は多少いますが、何に使うのか知っている人は少ないようです。それを知っている人から聞いたところ、これがムザウィ(水車)だそうです。風の力を利用して深い井戸から水を汲み上げる新式の水車だそうです。洗浦の人は目がくらむほど見るものですが、ソウルではこの恵化洞のものが珍しい名物になっているそうです(『東亜日報』1924.7.24)。

ドイツの宣教師であったノルベルト・ウェーバー (Norbert Weber: 1870-1956) は、朝鮮滞在時の記録に基づき、1915年に*Korea-Im Lande der Morgenstille* (朝鮮：静かな朝の国で) を初版刊行した。1925年には、再び朝鮮を訪問し、当時の朝鮮人の生活を1万5千メートル分量の35mmフィルムに記録し、ドイツでもドキュメンタリー映画(無声映画)として公開した。このフィルムは、1970年代末、ドイツ南部のミュンヘン近所の修道院の地下室で発見されており、韓国でも2010年2月21日、公営放送局のKBSによってその映像が紹介された。

ところが、1927年、咸鏡南道・元山(ウォンサン)に新しい修道院が建てられ、恵化洞で活動していたベネディクト会の修道士たちがそこを担当することになり、彼らは恵化洞を離れるようになった。その後、修道院の敷地にあった工場や学校の建物を、恵化洞聖堂(1927年)、東星中高校(カトリックミッション系、1929年恵化洞に移転)、恵化幼稚園(1937年設立、恵化洞聖堂の附設)が使用するようになり、恵化洞聖堂は設立から約70年後「リトル・マニラ」を恵化洞に誕生、維持させるに大きな役割を果たすことになる。

4 恵化洞「リトル・マニラ」

柏洞修道院の売却後、恵化洞一帯は、学校村と文化村としてさらに発展してきた。恵化洞はもともと中上層以上の朝鮮人の居住地域であり、植民地時代には日本人たちも多く生活していた。柏洞修道院の売却後にはその一部を京城帝国大学が使用しており、先述のように、修道院の建物を恵化洞聖堂や恵化幼稚園、東星中高校も使用していた。終戦による京城帝国大学の閉校後、そこには国立ソウル大学校が設立され、「大学路」という現在の道路名が付けられた。この地域と周辺には、ソウル大学校(同校は1975年に現在の新林洞キャンパス(冠岳区)へ移転)の他に、カトリック大学校(1855年開校。1954年、医学部を設立し、現在韓国で最も多い8つの総合病院を運営している)や、成均館大学校も位置している。1980年代と1990年代には、多くの芸術文化施設が続々と設立され、さらにその施設が増え、この一帯は、新村・弘大と並んで、ソウルの代表的な大学村・文化村として位置づけられている。

このように柏洞修道院・ドイツ村といった異文化のまちの土壌の上に成り立った大学村・文化村に、多くのフィリピン人たちが定期的集まるようになったのは、1996年12月、恵化洞聖堂でフィリピン人の神父によるタガログ語のミサが行われるようになってからである。しかし、恵化洞とフィリピン人たちのつながりは、その前から設けられていた。4年前の1992年に、韓国に居住・労働するフィリピン人のために「恵化洞フィリピンカトリック共同体」(2017年に「ソウルフィリピンカトリック共同体」へ名称変更)が、カトリックソウル大教区社会司牧局移住司牧委員会の傘下に組織されていた。1992年、タガログ語でのミサは、城東区紫陽洞(ソンドンクジャヤンドン)の聖堂で行われていたが、そこは中小企業が多い地域で、多くのフィリピン人が働いていた。フィリピンでは国民の80%以上がカトリックの信仰をもち、紫陽洞聖堂を訪ねるフィリピン人は、数人から2,000人まで増加した。収容上の困難もあり、カトリック・ソウル大教区の要請で、1996年12月からは、恵化洞聖堂でタガログ語でのミサを行うようになった。恵化洞聖堂におけるタガログ語でのミサは、3ヶ月のみの予定で始まったが、今まで27年間も続いている。1998年には、「フィリピン移住者のための司牧会」が結成され、宗教活動以外にも、フィリピンの人たちに教育活動(労働法、PCなど)、労働相談、育児支援などを通して生活支援活動を行なっている(ユスルギ 2022: 303-304)。このようにして、カトリックというフィリピン人たちの宗教、そして韓国のカトリック教会の組織的な支援が媒介となり、フィリピン人共同体が形成され、拡大・維持されてきたのである。

恵化洞にフィリピン人たちが集まるのは、毎週日曜日の午後1時半から3時までに行われる恵化洞聖堂でのタガログ語のミサへの参加が主な理由である。平均900人程度の人たちがタガログ語でのミサに参加しているが、クリスマスやイースターなどの祝日には参加者数が1,500人を超えることもある(カトリック

クソウル大教区社会司牧局移住司牧委員会)。

このミサの前後の時間帯である日曜日の午前10時から午後5時程度までに、恵化洞聖堂から東星中高校までの100メートルくらいの歩道に緑のテントが立ち並び、フィリピンのマーケットが開かれる。ここでは、フィリピンの料理や惣菜、野菜や果物、食材、お菓子、缶詰、酒、ソースなどが揃っている。ここで商売をしている人たちも、訪れる客もフィリピン人がほとんどであるが、異国風のソウルのまちを楽しむために訪れた韓国人や他の外国人もみえる。ここでは、簡易テーブルや椅子が用意されていて食事を楽しむフィリピン人たちの様子も見られる。

<写真1>恵化洞聖堂



*2017年8月20日、筆者撮影

<写真2>恵化洞のフィリピンマーケット



5 「違法」状態が20年以上も続くメカニズムは？：取り締まりと多文化性の奨励の間で

このフィリピンマーケットは、いわゆる商店街ではなく、恵化洞聖堂から東星中高校までの歩道の上に立ち並ぶ露天商・屋台が立ち並ぶということなので、合法的なビジネスではない。いわゆる、お店を構えている人たちではなく、家賃なども払わないので、所有者ではない。また、上述のように、ほとんどの人たちは、モノを売っている人たちも、買いに来る人たちも、ここの住民ではない。ここでミサが行われるようになってからは、千人以上の規模で訪問してくるため、自然発生的に露天商も増えてきたのである。当時は、戸惑いもあり、許可を得ていない露天商は取り締まりの対象なので、行政は同じ基準で取り締まりを行ってきており、一時期は完全禁止する措置すら出されていたこともあった。しかし、当時のメディア報道で、批判的な記事は少ない。

2000年5月4日付の『東亜日報』の記事、「リトルフィリピンを知っていますか」では、実際にフィリピンマーケットに出品している夫婦の話が紹介されていた。

ソジンスさん(38)の妻ビンコ・アンナベルさん(37)もフィリピン人女性で、日曜日に恵化洞市場に出て物を売っている。IMFで職を失ったソジンス氏も妻を助けるために出てくる。韓国語が苦手な市場の人々にとって、ソさんのような韓国人の役割は格別だ。とくに最近、鍾路区役所の取り締まりが厳しくなり、ソさんがやらなければならないことがより多くなった。

「4週間、取り締まりが厳しくなり、市場を開くことができませんでした。今日、1ヶ月ぶりに再開したんです。私たちが店を一つ手に入れて商売をしたいのですが、それが簡単なことではありません。すごく古くて小さい店を借りるにも、少なくとも5千万ウォンは必要です。それができないから、ここに出てきて商売をしているのではないのでしょうか。」(『東亜日報』2000.5.4)

1998年の韓国のIMFの危機後に職を失った韓国人の夫と、フィリピン人の妻の夫婦が日曜日のみここに露店を出すようになったという事情である。ここに集まる人々はこのまちの住人ではなく、また、訪れる人たちもそうなのである。多くは、ミサに参加するために来て、ついでに情報の交換や入手のためにこのまちを訪れているわけである。

また、この露天商が立ち並ぶ風景は、1995年頃から20年以上も経っているが、当時からも「違法」状態、あるいは「合法ではない」状態が指摘されていた。

実は恵化洞ロータリーから梨花洞交差点までの区間は露天商の絶対禁止区域。鍾路区は、これまでも数回に渡って特別取り締まり班を編成して集中取り締まりを行ってきている。鍾路区役所建設管理課の街路整備係の担当者は、「フィリピン人労働者の市場に関する苦情も多く寄せられ、東大門警察署からの取り締まりの要請もあっただけでなく、露天商絶対禁止区域でフィリピン人にだけ例外を適用することはできない」という立場を明らかにした(同上)。

ところが、この記事では、今後取り締まりが続く場合、恵化洞の「小さなフィリピン」は完全に消えるかもしれないと憂慮しつつも、「週に一度、贅沢とも言える買い物を楽しみながら寂しい心を癒していたフィリピン人労働者にとって、それは単に市場が一つなくなる以上の意味をもつだろう」とし、「この地で一緒に暮らしている隣人の存在すら忘れることにならないだろうか。私たちが住んでいるここには、少なくともフィリピン人が一緒に暮らしている。そして人が住むところには必ず市場ができるものだ」と結んでおり、人道的な立場で寛容を促している。

違法状態への指摘の中には、マーケットの存在だけではなく、恵化洞聖堂で記者が会ったフィリピン人の「ほとんど(原文のママ)は自分が『不法滞在者』であることを認めた」と指摘する報道もあった。しかし、この記事でも、違法性を告発するというよりは、「私たちの解放区」という見出しからも分かるように、むしろカトリック教会が、いわばシェルターになっていることを報じている(『朝鮮日報』2002.5.17)。

この記事によると、ほんの数年前まで、ミサがある日には、出入国管理事務所の職員がここを訪れたという。恵化洞聖堂の裴光億事務長の話しである。

機関員が来て不法滞在者を摘出すると言ってきました。だから、それは教会の外のことだと言って喧嘩までしたんです。裴事務長は「それ以来、一度も機関員が来たことはない」と笑った(同上)。

フィリピンマーケットは、この記事が書かれた2002年から20年以上も持続しているわけであるが、こ

のような存続危機が2010年にも、2014年にも度々報じられている。行政の立場は、違法であることと、通行の妨げになるとの苦情が出ていること、そして危険があることなどで、取り締まりの根拠が十分にあるが、それでも20年以上もこのマーケットが持続しているのには、どのような理由があるのだろうか。2023年現在も、フィリピンマーケットは続いているが、管轄の鍾路区役所としては、市民の不便を最小限に抑える範囲でフリーマーケットの便宜を図っている様子がかがえる。当初、最寄りの地下鉄駅（恵化駅）から恵化洞聖堂まで、30店舗以上の露店が立ち並ぶ状況だったが、2010年頃からは、日曜日のみ開店し、通行の妨げにならないように露店数を15店までに減らし、恵化洞聖堂側の区間（同聖堂から東成高校までの区間）、すなわちカトリック教会の、いわば境内だけにするという「自主的な措置」が行われたという。

6 メディアイメージと場所の象徴

もう一つの重要な存続理由として、メディア報道などの言説、象徴的な言説が挙げられる。カトリック教会や当事者たちの自助努力による行政との交渉がフィリピンマーケットを存続させてきた重要な背景ではあるが、メディアがそのマーケットに対する影響力のあるイメージを作り上げ、広く拡散させてきたことも重要であろう。伝統的な印刷メディアや放送メディアだけでなく、ウェブサイト、ブログ、オンライン旅行ガイド、エンターテインメント・ガイドも、ソウルのフィリピンマーケットの風景やイメージを地元と世界のオーディエンスに届けている。こうしたイメージは、当事者たちの行政との交渉においても、社会的な発信においても重要な資源となるのである。

当初から、このフィリピンマーケットは、度々メディアによって報じられてきた。時には、行政による取り締まりで存続の危機が報じられたりもするが、概ね、「ソウルでフィリピンを楽しむ」ことができる、といったような肯定的な報道も多かった。例えば、聯合ニュースTVのニュース番組では、「韓国で外国の雰囲気を感じることができる場所」として、「日曜日に恵化洞に行けば、東南アジアの情緒を感じることができる」という紹介をしながら、「週末を利用して一度立ち寄ってみてはいかがでしょうか」と促すようなレポートを伝えており、そこでは「違法性」の指摘は一切なかった（『聯合ニュースTV』2014.1.12）。

また、このように日曜日に多くのフィリピン人が集まるようになると、近所の銀行はその人たちからの預金や国際送金のニーズに合わせて、日曜日の特別営業を行うようになった。ウリ銀行恵化洞支店はフィリピン人のために日曜日の午前10時から午後4時まで特別営業をしている。平日に銀行に来られない労働者たちが、日曜日ごとにここに立ち寄り給料を預けたり、国際送金をしたりしているという。2009年12月6日、同銀行は、フィリピンの本や映画DVDを備えたフィリピン人のための「쉼터(憩いの場)」を銀行の2階に設置した。当日の開設式には、ウリ銀行長、駐韓フィリピン大使、国会議員、鍾路区役所長、フィリピン労働者100人余りが参加した。これを伝えるニュースによれば、「外国人労働者の預金額は1千5百億ウォン、送金は年間6千億ウォンに達」するそうで、銀行側としては「重要な顧客」と捉えていることがわかる。ニュースの括りは、「国内に居住する外国人労働者は約60万人。産業界はもちろん、銀行にとってもこれらはもはや無視できない重要な市場となっています』であった（MBCニュース、2010.9.19）。

このようにメディア報道などによる社会的な公共圏における存在への承認、そして銀行などのビジネスセクターによる承認などに加えて、別の行政からの承認の動きも展開されている。ソウル市が運営する外国住民総合支援機関であるソウルグローバルセンターは、このフィリピンマーケットの近くで「出張週末移動相談サービス」と「出張週末韓国語教室」を運営している。同センターの説明では、平日に当センター訪問が困難な外国人住民のために、週末に外国人の多い地域を訪ねて労務や産業災害、人権問題などの相談、そして無料漢方サービスなども行っているという（ソウル特別市 2018）。このように、同じ行政であっても、管轄道路における遵法や安全を管理する立場である鍾路区役所の道路交通課と、ソウル市の女性家族政策室の多文化化に関わる部署における取り組みには、齟齬が存在することもある。齟齬というより、異なる政策目標をもっているという方が良いかもしれない。

この地域では、外国人向けの医療サービスも行われてきた。東星高校講堂4階で、現在の建物に移転するまでの16年間にわたり、外国人労働者のための無料診療所「ラファエルクリニック」⁶⁾が毎週日曜日に300人余りの外国人を診療してきた。ラファエルクリニックは1997年4月、移民労働者の劣悪な診療環境を解消するため、ソウル大学校医学部のカトリック教授会が中心となって、CaSA（ソウル大学校医学部のカトリック学生会）と共に始まった。中心的な人物は、ソウル大学医学部教授のアンギュリ氏で、1997年4月に恵化洞聖堂内に移民労働者のための無料簡易診療所を設置した。故キムスファン枢機卿との縁で死刑宣告を受けていた二人のパキスタン人の死刑囚（後に再審により無罪が確定）と会った後、外国人労働者の劣悪な医療現実に直面したのがきっかけだった。

同診療所の開設や運営には、カトリック教会の支援も重要であった。最初に簡易診療所が設置された恵化洞聖堂の柏洞館に患者が次第に増え、診療が困難になると、キムスファン枢機卿は、約2ヶ月後、カトリック大学誠信館を開放し、診療を続けることができるように支援した。それから1年余り経った1998年6月、当時ソウル大教区補佐司教だったカンウイル司教と東星高校の協力で診療所は東星高校4階講堂に移転した。カン司教は癒しの大天使であるラファエル天使の名前を借りて「ラファエルクリニック」と名付けた。

このように始まったラファエルクリニックは、26年以上が過ぎた現在、地下1階、地上5階規模の新診療所（城北区城北洞。これもカトリックソウル大教区からの無償賃貸）において、20万人（2023年末現在）の外国人労働者と多文化家族をケアする医療奉仕団体に成長し、地方に居住する移民労働者と多文化家族、北朝鮮からの脱北者のために地域に出向く移動クリニックを実施している（ラファエルクリニックのホームページ）。

7 ストリートは誰のものか？

このような多文化化をポジティブに伝えるメディア報道や社会の多文化化に対応する多文化化政策の管轄行政による支援策などは、このマーケットが存続され、まちに新たなカラーを塗り重ねていくための資源となるが、それと同時にそこに集まる人々には一種の「精神的所有意識 (moral ownership)」または「帰属意識」を感じさせることにもつながる。精神的所有意識とは、法的所有権を超えた帰属意識であり、

その空間の文化との同一性に基づくもので、その場で行われる日常的な行動や交流のなかで得られ、強化されるものである。特定のグループがある街に「所属している」という感覚は、やがて「所有している」という感覚にもつながることがあり、そこで、包摂の感覚は、しばしば他者を排除することを意味することもある(Zukin 2016: 25)。

はたして、ここを訪れるフィリピン人たちにとっては、このまちはどのような意味をもつのだろうか。先述のように、ここは日曜日にタガログ語で行われるミサに参加するために来るのであり、市場で必要なものを購入することができるが主たる訪問の目的であるが、それだけではない。さまざまなメディア報道に登場する当事者たちの声は、例えば、「フィリピン料理が食べたい」「家族のためにお金を送るため」「ここに来ると故郷を感じることができ、よく来る」「売買する市場の概念よりも、フィリピン人同士の情報共有の場であり、故郷と言えり」などの意見が多いことがわかる。

さらに、YouTubeなどのソーシャルメディアでは、ここを訪ねる動画の投稿も多い。韓国で暮らす韓国・フィリピンカップルのYouTube映像⁷⁾では、「フィリピンの妻と恵化洞フィリピンマーケットに行ってきました」というレポートもあるが、このようなネット空間におけるこの場所のイメージも、場所の象徴性、帰属意識、所有意識を考える上で、重要になってくるだろう。

8 むすびに代えて

恵化洞には、多くの小劇場があり、芸術文化の街として知られていた。恵化洞のフィリピンマーケットまたはフィリピン村は他のエスニックタウンとは異なる意味をもつ。恵化洞のフィリピン村は日曜日だけ成立する、いわばパートタイムのエスニックタウンである。日曜日にタガログ語のミサに参加するために、ソウル近郊だけでなく、京畿道からも恵化洞聖堂に来て、そこで開かれるフィリピン市場で様々な物を購入し、フィリピン人と会って交流し、情報を交換し、そして特別営業している銀行で預金、送金などを処理し、銀行が提供する空間で本を読んだり、友達に会ったりする。ラパエル無料クリニックで診療を受けることもある。

さらに注目すべきは、フィリピン村を構成するのは、そこに集まるフィリピン人だけではないということである。恵化洞、または日曜日の恵化洞は、韓国人にとっても韓国でフィリピンを、ソウルでマニラを体験できる空間でもあり、ソウルを訪れる多くの外国人観光客にとってもフィリピンを体験できる空間である。ソウルの多様性を感じ、体験できる空間なのである。フィリピンマーケットが形成された場所は、住宅地でも商業地域でもない通路であり、恵化洞地域には複数の大学キャンパスがあり、演劇小劇場も多く、文化芸術の町として認識されている場所である。そして、ここは恵化洞聖堂が100年以上存在してきた場所であり、100年前からドイツ村と呼ばれることもあるところで、そのような理由からゲーテ・インスティテュートも位置している。このような歴史と背景が、日曜日の午後に聖堂に行く通路にカトリック信者であるフィリピン人たちが集まって市場を形成できるようにする寛容の背景になったとみることもできるだろう。

また、韓国社会における民主化と多文化に対する寛容の雰囲気を持続的に拡大してきた点も重要であ

る。そのような社会的雰囲気、道路交通行政の次元での行政の厳格な執行よりも、人道的な観点から寛容の態度がより強調されるメディア報道につながったとも言えるだろう。行政の面でも、管轄区役所である鍾路区は道路交通行政を執行する立場で継続的な取り締まり、管理の立場を堅持してきたが、ソウル市が推進する多文化政策の面では、フィリピンマーケットを奨励することはできないが、そこに集まる人々のための相談センターの設置や様々な支援活動を展開することができるという点で注目された。そのほか、ウリ銀行の日曜日の特別営業も、必ずしも送金業務や預金の顧客として注目したというよりは、そこに設置されたフィリピン人向けの「憩いの場」の開設式に、フィリピン大使まで参加するイベントになった背景には、韓国とフィリピンの外交関係、大きな文脈で韓国のソフトパワーを向上させることができる政策目標を考慮した動きだったと見ることもできるだろう。

注

- 1) 韓国法務部の滞留外国人のデータに基づいている。滞留外国人のデータには、滞在期間が91日以上長期外国人(外国人登録の対象)と、91日未満の短期外国人、そして国内居所申告をする外国籍同胞が含まれている。
- 2) 韓国法務部の滞留外国人のデータに基づいている。
- 3) 91日以上滞在する登録外国人のデータには、外国人登録の対象ではない91日未満の短期滞在外国人と国内居所申告をする外国籍同胞は含まれていない。2021年末現在、全体滞留外国人のうち登録外国人は56%、短期滞留者20%、在外同胞24%程度である。
- 4) 登録外国人のデータには入っていない短期外国人(滞在期間91日未満)などを含むと、韓国におけるフィリピン人数は、4万6,871人(登録フィリピン人より23%増加)である。不法滞在者(1万3,613人)まで含むと6万人を超える。
- 5) 恵化洞におけるカトリックの歴史については、主にユスルギ(2022)が参照されている。
- 6) ラパエルクリニックについては、主にラパエルクリニックのホームページが参照されている。
- 7) 韓国・フィリピン夫婦のビデオブログ, <https://www.youtube.com/watch?v=3F11pSu8Wx4> (2023年12月25日アクセス)。

参考文献及び資料

- MBC뉴스, 2019, 「은행 “외국인 고객 잡아라”…휴일에도 ‘개점’」, 2019.9.19, <https://n.news.naver.com/mnews/article/214/0000154235> (=MBCニュース, 2019, 「銀行、『外国人客を捕まえ』…休日にも『営業』」, 2019年9月19日) .
- カトリックソウル大教区社会司牧局移住司牧委員会 (카톨릭 서울대교구 사회사목국 이주사목위원회) のホームページ (<http://www.seoulmigrant.net/load.asp?subPage=311>) .
- 韓国統計庁(한국통계청, KOSIS)のホームページ (https://kosis.kr/statHtml/statHtml.do?orgId=111&tblId=DT_1B040A9C&conn_path=I2) .
- 韓国法務部(한국법무부)のホームページ (<https://www.moj.go.kr/moj/2412/subview.do>) .
- 김경희, 2000, 「혜화동의 ‘작은 필리핀’을 아시나요」, 『동아일보』, 2000.5.4, <https://www.donga.com/news/article/all/20000504/7531844/1> (=キムギョンヒ, 「恵化洞の『小さなフィリピン』を知っていますか」, 『東

垂日報』, 2000年5月4日, 2009年9月22日にアップデートされたことが記されている)。

- 金兌恩, 2016, 「社会の多文化化と政策の対応: 日韓比較の視点から」, 『応用社会学研究』第58号, 立教大学社会学部, 159-174.
- _____, 2018, 「韓国の多文化化と中国朝鮮族: ソウル・大林洞におけるフィールドノート」, 『応用社会学研究』第60号, 立教大学社会学部, 227-239.
- _____, 2022, 「ソウルのフレンチ村: 『ソレマウル』でのフィールドワーク」, 『応用社会学研究』第64号, 立教大学社会学部, 239-249.
- 김보경, 2010, 「13년 된 필리핀장터, 혜화동서 내몰리나」, OhmyNews, 2010.2.11, https://m.ohmynews.com/NWS_Web/Mobile/amp.aspx?CNTN_CD=A0001322199 (=キムボギョン, 2010, 「13年も続いたフィリピンマーケット、恵化洞から追い出されるのか」, 『オーマイニュース』, 2010年2月11日)。
- 서울특별시, 2018, 「서울시, 찾아가는 이동상담 서비스 개최」, <https://news.seoul.go.kr/welfare/archives/126866>(=ソウル特別市, 2018, 「ソウル市, 訪ねていく移動相談サービスの開催」)。
- 박영철·안용균, 2002, 「[우리들의 해방구] 서울의 '리틀 마닐라' 혜화동」, 『조선일보』, 2002.5.17, https://www.chosun.com/site/data/html_dir/2002/05/17/2002051770283.html (=「パクヨンチョル・アンヨンギュン, 2002, 「私たちの解放区」ソウルの『リトルマニラ』恵化洞」, 『朝鮮日報』, 2002年5月17日)。
- 유슬기, 2022, 「혜화동 커뮤니티의 어제와 오늘: '독일인 마을'과 '리틀 마닐라'를 중심으로」, 서울역사편찬원, 『서울내 외국인 집단 형성지』, 275-317 (=ユスルギ, 2022, 「恵化洞コミュニティの昨日と今日: 『ドイツ村』と『リトルマニラ』を中心に」, ソウル歴史編纂院, 『ソウルの中の外国人集団の形成地』, 275-317)。
- ラパエルクリニック(라파엘 클리닉)のホームページ, http://raphael.or.kr/ko_KR/.
- 연합뉴스TV, 2014, 「“서울에서 필리핀 즐겨요” 혜화동 ‘리틀마닐라」, 2014.1.12, <https://n.news.naver.com/mnews/article/422/0000044176> (=聯合ニュースTV, 「ソウルでフィリピンを楽しむ: 恵化洞、リトルマニラ」, 2014年1月12日)。
- 연합뉴스TV, 2014, 「이주민의 쉼터 ‘혜화동 리틀 마닐라」, 2014.1.13, <https://n.news.naver.com/mnews/article/422/0000044256> (=聯合ニュースTV, 「移住者たちの憩いの場, 恵化洞 リトルマニラ」, 2014年1月13日)。
- 「내 동리 名物: 恵化洞風車」, 『동아일보』, 1924.7.24, 3면(=「私の町の名物: 恵化洞の風車」, 『東亜日報』, 1924年7月24日, 3面)。
- 「사설 “곧 인구 5%가 외국인”...우리도 ‘다인종 다문화 국가」, 『동아일보』, 2023.10.30 (=「社説『まもなく人口の5%が外国人』…我々も『多人種・多文化国家』」, 『東亜日報』, 2023年10月30日)。
- Zukin, Sharon, Philip Kasinitz, and Xiangming Chen, 2016, *Global Cities, Local Streets: Everyday Diversity From New York To Shanghai*, Routledge, p.25.